

バレエ文化史研究の基盤整備

鈴木, 晶 / SUZUKI, Sho

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2016-06

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320044

研究課題名(和文)バレエ文化史研究の基盤整備

研究課題名(英文)Basic Studies for the Cultural History of the Ballet

研究代表者

鈴木 晶 (SUZUKI, Sho)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：50196804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,700,000円

研究成果の概要(和文)：他の芸術分野に比べて、舞踊学は大きく遅れをとっており、とくにバレエに関する学術研究はまだ乏しい。私たちはそれを打開すべく、バレエ文化史研究の発展のための基盤整備に取り組んだ。

本研究の最大の成果は、近代バレエが生まれた19世紀初頭においてバレエ発展の中心であったパリ・オペラ座の全上演記録データベースの作成であるが、この世界初の試みを無事完成させることができ、その成果の一部を舞踊学会にて発表した。

他の研究成果についてはすべてウェブサイトに掲載することができた。これによって、わが国のバレエ研究に大きく貢献したと自負している。

研究成果の概要(英文)：In Japan, unlike in Europe and US, dance studies are not developed yet. Especially the study of ballet is far from being developed. To change the situation, we tried to establish the basis on which farther studies can develop.

The most important result of our research is the database of the repertory of the Paris Opera Ballet, which was the center of ballet in the early 19 century when so-called modern ballet was born. We have accomplished the database and we read a paper on the database at the academic meeting of the Dance Research Association Japan.

And we have put all the other results on our website, which, we are sure, will contribute a lot to the farther development of the academic study of ballet.

研究分野：舞踊史

キーワード：舞踊学 舞踊史 バレエ バレエ史 身体表現 身体表象 文化史

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパ文化史において、舞踊は最も重要な柱のひとつであるにもかかわらず、これまで美術史や音楽史と比べて、舞踊史は著しく未発達であった。舞踊は「形に残らない」ことが最大の原因である。いっぽう、芸術学全体においても、美術や音楽に比べ、舞踊はその発展が著しく遅れている。分野として大変小さく、学術大系、とくに芸術学における位置づけもいまだ不安定である。

さらに舞踊研究の中でも、バレエ研究は一貫して「少数派」であり、大学に籍を置くバレエ研究者はきわめて少ない。これは日本の学校教育において、いわゆるモダンダンスのみが取り入れられ、バレエは意図的に排除され、その結果、学校の外(バレエ学校、バレエ教室)で教育されてきた。

日本国内での学術的バレエ研究はほぼ皆無である。これまでの数少ない研究は、本研究の代表者および分担者によって担われてきたといっても過言ではない。国外においても、バレエ研究者は舞踊研究全体のなかで少数派であるといえるが、バレエ(ダンス・クラシック)を基礎とするコンテンポラリー・ダンスが増えてきたこともあって、バレエそのものに対する再評価と研究がすすんでいる。そうした国外の研究者との交流を深めるためには、日本の研究者が国際的バレエ研究に貢献できるようでなければならない。

2. 研究の目的

本研究の目的は「学術的バレエ研究」の確立であり、バレエをヨーロッパ文化史の中に明確に位置づけることをめざす。これはまちがいがなく、わが国で初めての取り組みである。

日本は「バレエ大国」でありながら、これまではいわゆる評論家による趣味的なバレエ研究しか存在しなかった。まだ数少ない学術的バレエ研究者の力を結集して、これまでの研究成果を集約するとともに、文化史学と表象文化論を基盤とし、さらに哲学的身体論、精神分析的な身体論、パフォーマンス論などを取り入れた学際的な研究をめざす。

研究基盤を整備することによって、次世代の研究者育成につとめるとともに、学術的バレエ研究の重要性を広く社会に訴える。

3. 研究の方法

本研究は4年間の研究期間で、以下6つの方法によってバレエ文化史研究の基盤整備を進めた。

- (1)パリ・オペラ座バレエの上演データベース構築とレパートリー分析
- (2)マリインスキー劇場およびワガノワ・アカデミーへの訪問調査
- (3)バレエ文化史に関する各種研究会の開催
- (4)学会における研究成果の発表
- (5)一般紙誌・図書による研究成果の発信
- (6)ウェブサイトの構築

4. 研究成果

(1)パリ・オペラ座バレエの上演データベース構築とレパートリー分析

パリ・オペラ座バレエは、近代バレエの成り立ちにおいても、バレエの技法と理論の発展においても中心的な役割を果たしてきた点で、バレエ史において特別の位置を占めている。同団における1776年1月1日から2014年7月31日までの239年間に上演した全公演記録を調査して、約7万5000件の上演記録データベースを構築し、計量的な分析によって同バレエ団の上演史に新たな光を当てることを試みた。

おもな情報源は、手書きノートの『オペラ座日誌』と、ウェブ公開データベースの『メモペラ』である。前者は1776年から1981年まで205年間、後者は1980年から2014年まで34年間のデータで、両者を統合することで上演記録データベースを構築した。

分析の手始めとして、総上演回数10位までのバレエ作品10タイトルに限定し、239年間にわたる上演頻度の変化を詳細に検討した。1位から10位は、『コッペリア』、『ジゼル』、『プシシェ』、『白鳥の湖』、『テレマック』、『白の組曲』、『ラ・シルフィード』、『舞踊組曲』、『祭りの夜』、『水晶宮』である。

分析の結果、上演頻度の増減傾向は、(a)芸術監督の交替、(b)観客の嗜好と文化的潮流の変化、(c)近傍年の上演作品との関係で説明できることが明らかとなった。

(2)マリインスキー劇場およびワガノワ・アカデミーへの訪問調査

マリインスキー・バレエは、ロシアでもっとも伝統あるバレエ団として19世紀後半に古典バレエを完成させ、現在に至るまで世界最高水準の上演を行っている点で、パリ・オペラ座バレエと並び、バレエ史において特別の位置を占めている。同団および併設されているワガノワ・アカデミーを訪問して視察調査を行うことで、バレエ文化史研究の基礎知識を改めて整理し、さらにロシア・バレエに関する新たな知見を獲得することができた。

具体的には、ワガノワ・アカデミーの複数のレッスン、マリインスキー・バレエのレッスンおよび複数のリハーサルを見学した上で、伝統あるマリインスキー劇場において『眠れる森の美女』および『パヤデルカ』という歴史的演目を鑑賞することで、技術水準の極みと文化的蓄積の重みを直接感得できた。また、ワガノワ・アカデミー内の博物館、エルミタージュ美術館、エカテリーナ宮殿などサンクトペテルブルクの文化施設を見学することで、ロシア・バレエを育んだ文化的環境について研究の素材を豊富に入手した。

さらに、同劇場におけるバットシェバ舞踊団の公演と、訪問時に開場したばかりの新劇場におけるオペラ公演の見学を通して、サンクトペテルブルクの芸術環境に関する最新事情を獲得した。

(3)バレエ文化史に関する各種研究会の開催
バレエ文化史研究の基盤整備として、国内に数少ない学術的バレエ研究者を集めて各種研究会を企画、実施した。4年間で実施したのは、以下の3つの研究会である。

第1に、「実験工房」シンポジウムを開催した。「実験工房」が催した「実験バレエ劇場」は、第2次大戦後のわが国の前衛芸術運動において重要な役割を果たしたにもかかわらず、これまで日本バレエ史においてまったく注目されてこなかった。そこで専門家の西澤晴美氏(神奈川県立近代美術館)、舞踊評論家の山野博大氏、うらわまこと氏、バレエ史家の川島京子氏を招き、シンポジウムを開催することで、日本バレエ史に新たな知見をもたらすことができた。

第2に、ニーナ・アナニアシヴィリ講演会を開催した。1990年代に世界最高のバレリーナと賞讃されたグルジアのアナニアシヴィリ氏を招聘し、講演会を開催(法政大学総合科目「身体表現論」との共同主催)することで、世界トップクラスのバレリーナから見たバレエ芸術の本質について話しを聞き、バレエ現代史に関する考察を深めた。

第3に、『Apollo's Angels』読書会を継続的に開催した。2010年に米国で刊行された同書は、17世紀から20世紀までのバレエの歴史を著者独自の視点から豊富な事例で解説した良書である。この600頁を超える図書を1回に1章ずつ批判的に読解し、専門知識や意見を交換する読書会を、1、2カ月に1回の頻度で2年にわたって行った。参加者は研究代表者、研究分担者に加えて、バレエ研究を行っている複数の研究協力者と大学院生である。新たなバレエ通史を執筆する準備をすることができた。

(4)学会における研究成果の発表

本研究の研究成果のうち、(1)は舞踊学会定例研究会において発表した。(2)、(3)を含めた研究協力者の研究成果は、舞踊学会、比較舞踊学会、兵庫体育・スポーツ科学学会などでの口頭による発表と、各所属大学の刊行物での論文による発表を行った。

詳細は下記「5. 主な発表論文等」に掲載した通りである。

(5)一般紙誌・図書による研究成果の発信

本研究は、バレエ文化史に関する基礎知識を整理し、「正しい」バレエ史の概略を把握することと、それを広くバレエ関係者とバレエ鑑賞者へ伝えること、さらに学術的バレエ研究の重要性を広く社会に訴えることも重要な目的と位置づけて進めた。

そのため、(1)～(3)の研究成果に加えて、研究代表者、研究協力者が海外出張および長期海外研究において調査、収集、分析したデータ・情報に関しては、バレエ専門誌である『ダンスマガジン』や全国紙である『読売新聞』などにおいて、積極的に発信した。また、研

究代表者の著書『オペラ座の迷宮/パリ・オペラ座バレエの350年』も、本研究の研究成果を取り込んで執筆したものである。

詳細は下記「5. 主な発表論文等」に掲載した通りである。

(6)ウェブサイトの構築

本研究の研究成果を発表・発信する場としてのみならず、バレエ文化史研究を学際的に進めるためのヴァーチャルな研究拠点として、ウェブサイトの構築を進めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計34件)

海野敏「欲望、美へと昇華」『ダンスマガジン』査読無, 2016, Vol. 2016, No. 3, pp. 92-93.

鈴木晶「フイエ『舞踊記譜法』(1700)をめぐって」『Who Dance? 振付のアクチュアリテイ』査読無, 2015, pp. 230-241.

渡沼玲史「振り付けなきダンスのための振り付け」『Who Dance? 振付のアクチュアリテイ』査読無, 2015, pp. 148-157.

海野敏「日本のバレエを前へ」『ダンスマガジン』査読無, 2015, Vol. 2015, No. 12, pp. 32-33.

海野敏「バレエという芸術の可能性」『ダンスマガジン』査読無, 2015, Vol. 2015, No. 11, pp. 50-51.

海野敏「美しく深いおとぎ話」『ダンスマガジン』査読無, 2015, Vol. 2015, No. 10, pp. 78-79.

海野敏「対照的だったギエムとステパネンコ」『ダンスマガジン』査読無, 2015, Vol. 2015, No. 9, pp. 44-45.

海野敏「ENBの存在感をより高める口ホの戦略」『ダンスマガジン』査読無, 2015, Vol. 2015, No. 6, pp. 25-27.

鈴木晶「ワーナー/パークリーの黄金時代」『みずず』査読無, 2015, No. 636, pp. 38-49

海野敏「英国バレエ・ダンス最新地図」『ダンスマガジン』査読無, 2015, Vol. 2015, No. 4, pp. 24-29.

市瀬陽子「ピエール・ラモ『ダンス教師』(5)」『聖徳大学言語文化研究所論叢』査読有, 2015, Vol. 22, pp. 265-296.

- 海野敏「バレエが描く“喪失”」『ダンスマガジン』 査読無, 2015, Vol. 2015, No. 2, pp. 64-65.
- 海野敏「マシュー・ボーンの新プロジェクト」『ダンスマガジン』 査読無, 2015, Vol. 2015, No. 1, pp. 68-69.
- 鈴木晶「『四十二丁目』」『みすず』 査読無, 2014, No. 633, pp. 28-36.
- 鈴木晶「ハイキックとタップ」『みすず』 査読無, 2014, No. 632, pp. 38-50.
- 鈴木晶「コーラスガールの起源」『みすず』 査読無, 2014, No. 631, pp. 6-16.
- 鈴木晶「銀幕のレビュー(2)」『みすず』 査読無, 2014, No. 630, pp. 36-45.
- 鈴木晶「銀幕のレビュー」『みすず』 査読無, 2014, No. 629, pp. 38-49.
- 海野敏「新たな物語バレエが誕生」『ダンスマガジン』 査読無, 2014, Vol. 2014, No. 8, pp. 42-44.
- 鈴木晶「ブームの到来」『みすず』 査読無, 2014, No. 628, pp. 38-47.
- ②①海野敏「ロホの果敢なプロダクション」『ダンスマガジン』 査読無, 2014, Vol. 2014, No. 7, pp. 58-61.
- ②②鈴木晶「曲芸としてのバレエ」『みすず』 査読無, 2014, No. 627, pp. 26-36.
- ②③鈴木晶「世界初のミュージカル映画」『みすず』 査読無, 2014, No. 626, pp. 22-30.
- ②④市瀬陽子「ピエール・ラモ著『ダンス教師』(1725年) 4」『聖徳大学言語文化研究所論叢』 査読有, 2014, Vol.21, pp. 351-376.
- ②⑤海野敏「出自と伝統で魅せる」『ダンスマガジン』 査読無, 2014, Vol. 2014, No. 1, pp. 16-17.
- ②⑥関典子「Site Specific Dance Performance考～コンテンポラリーダンスにおける動向に着目して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要』 査読無, 2014, Vol. 8, No. 1, pp. 141-150.
- ②⑦海野敏「精鋭たち、一堂に会す」『ダンスマガジン』 査読無, 2013, Vol. 2013, No. 11, pp. 44-43.
- ②⑧海野敏「妙なる音に寄せて」『ダンスマガジン』 査読無, 2013, Vol. 2013, No. 6, pp. 57-59.
- ②⑨市瀬陽子「ピエール・ラモ著『ダンス教師』(1725年) 3」『聖徳大学言語文化研究所論叢』 査読有, 2013, Vol. 20, pp. 311-329.
- ③⑩海野敏「新鮮な驚き 9年ぶりの再演」『ダンスマガジン』 査読無, 2012, Vol. 2012, No. 9, pp. 29-31.
- ③⑪海野敏「伸びやかなソロ」『ダンスマガジン』 査読無, 2012, Vol. 2012, No. 6, pp. 40-42.
- ③⑫海野敏「伊達男の変身」『ダンスマガジン』 査読無, 2012, Vol. 2012, No. 5, pp. 28-29.
- ③⑬海野敏「新境地をめざすネザールランド・ダンス・シアター」『ダンスマガジン』 査読無, 2012, Vol. 2012, No. 5, pp. 78-79.
- ③⑭海野敏「バレエ『シンデレラ』の歴史：プティパ、アシュトンからマラーホフ、ピントレーまで」『新国立劇場バレエ団 シンデレラ プログラム』 査読無, 2012, pp. 14-17.
- 〔学会発表〕(計7件)
- 鈴木晶, 海野敏「パリ・オペラ座バレエのレパートリー、とくに上演頻度上位の作品の経年変化～全上演記録の分析をもとに」舞踊学会 第20回定例研究会, 2015年6月7日, 日本大学芸術学部(東京都・練馬区)
- 渡沼玲史「ウィリアム・フォーサイスの即興におけるダンスの主体」第64回舞踊学会大会, 2012年12月2日, 東京大学(東京都・文京区)
- 関典子, 萩原大河「コンタクトワークを取り入れた表現運動の授業実践」第65回舞踊学会大会, 2013年12月7日, 愛知芸術文化センター(愛知県・名古屋市)
- 関典子「"動きの言語(movement language)"考～GAGAと舞踏譜を例として」比較舞踊学会 第25回大会, 2014年12月7日, 聖心女子大学(東京都・渋谷区)
- 萩原大河, 國土将平, 関典子, 金山千広「表現運動における「コンタクト・ダンス」教材化の試み～運動有能感の観点から」第66回舞踊学会大会, 2014年11月30日, 日本女子体育大学(東京都・世田谷区)

岡元ひかる, 関典子「オハッド・ナハリンのGAGA考」舞踊学会 第19回定例研究会, 2014年6月15日, 京都女子大学(京都府・京都市)

関典子, 萩原大河, 國土将平, 金山千広「身体に注目した表現運動の実践可能性の検証」兵庫体育・スポーツ科学学会 第25回大会, 2014年5月31日, 兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス(兵庫県・神戸市)

〔図書〕(計3件)

薄井憲二(総監修)・関典子(監修)『薄井憲二バレエ・コレクション 目録第4巻(衣装・小物類・写真・ポストカード・ドキュメント・補遺など)』兵庫県立芸術文化センター, 2016, 198 p.

渡沼玲史(共訳), 松澤慶信(監訳)ほか『20世紀ダンス史』慶応義塾大学出版会, 2013, 968 p.

鈴木晶『オペラ座の迷宮～パリ・オペラ座バレエの350年』新書館, 2013, 373 p.

〔その他〕

ホームページ「バレエ文化史」
<http://shosuzuki.ws.hosei.ac.jp/wp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 晶 (SUZUKI, Sho)
法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号: 50196804

(2)研究分担者

市瀬 陽子 (ICHISE, Yoko)
聖徳大学・音楽学部・准教授
研究者番号: 90316852

海野 敏 (UMINO, Bin)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号: 80232891

関 典子 (SEKI, Noriko)
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号: 30506457

渡沼 玲史 (WATANUMA, Reishi)
一橋大学・法学研究科・助手
研究者番号: 50419751

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者

長野 由紀 (舞踊評論家)
村山 久美子 (舞踊評論家)
森 立子 (バレエ史研究者)